兄ちゃんの恨み

みゃお

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
兄ちゃんの恨み

【Ｎコード】
Ｎ８４８７Ｒ

【作者名】
みゃお

【あらすじ】
兄ちゃんの恨み、晴らしに来たよ♪

この子、一体何者ー？

何の恨みかって？

「ねーねー、早乙女乱馬ってどこ～？」

「早乙女乱馬ぁ？そいつならあそこ。」

「へぇ…あいつが早乙女乱馬ねぇ…」

「あいつに…何か用？」

「別に、そんな大したことないよッ♪ありがとね☆」

そういった彼女は、校門の真横に立った。

「乱馬〜待て〜！！！」

「捕まえれるもんなら捕まえてみるんだな」

「ゴメンよっ」

といって周りの生徒を避けて走る

「逃げるのうまいね〜」

「あぁん？誰だ、お前」

「ねぇ、知り合い？」

「問答無用！！！」

彼女が地面に立てたもの。

それは

―番傘だった

「ねぇ、乱馬ぁ…知り合いなの？」

「見たことねぇ…お前は何者なんだ？」

（でも、この番傘どっかで見たような…それにこのパターン…前にもあったような）

「響牙瑠（ひびきはる）。」

（響ぃ？もしかして…コイツ！？）

「今日は兄ちゃんの恨み、晴らしに来たんだよ♪感謝してね～」

「誰が恨み晴らしに来たやつに感謝するか！！」

「兄ちゃん？誰のこと？」

「良牙だよ！！りょーが。今、どこほっつき歩いてるか分かんないんだけどねー」

「やっぱり良牙の…で、恨みって何なんだ？」

「ん～…試合をすっぽかした事ー？それとあともう2つ。」

「それで…あと2つって？」

「あかねさんの前で言っちゃってもいーのっかなー？」

「えっ私！？」

（あかねの前では言えない事…？んなモンあるか？取り敢えず）

「わーったわーった。こっちに来い！！」

「言いたいことわかったぁ？」

「変な女に蹴りいれられて、パンダに食われそうになったことか？」

「そーゆーことー。」

「ってか、良牙って兄妹いないはずじゃなかったのか？」

（俺が良い子として良牙の家に行ったとき、そう言ってたハズ…だが、あのド方向音痴の良牙の事だ。知らなくてもおかしくはない…）

「えっとねー。牙瑠は今、１３歳なの。」

「あぁ。って１３歳！？！？」

（コイツ、どーみても俺らと同い年だよな…）

牙瑠の身長はあかねを軽く越えていた

「うん。１３歳。牙瑠の家、み～んな方向音痴で…」

「それはよーーく知ってる。」

「兄ちゃんが生まれて３年後、お母さんは道に迷っちゃって家に帰れなくなっちゃって…そこで牙瑠が産まれたんだって～」

「じゃあ、会ったことないにーちゃんの事をどーして知ってるんだ？」

「お母さんが写真持ってて、それを牙瑠にくれたんだよ～♪ホラッ」

良牙が小さいころの写真だった

「おー…かわいーなー」

「その写真を元に兄ちゃん探してたの。そしたらそれに似た人がいて、ついていったんだよ。」

「それで？」

「崖のとこから変な女に蹴り入れられて、パンダに食われそうになってたんだよ～」

「それっていつの話だよ！？」

牙「えーっとぉ…あー…中国だと思う。」

「中国までどーやって行ったんだよ？」

「その人の後ろから泳いでいったよ☆」

「えっ…」

（お…よぐ？コイツどんだけ体力あるんだ…）

「日本に帰ってからも、けっこーその人見たんだ～♪そしたら、その人の名前が”良牙”だって分かって～」

「だから…兄ちゃんの恨み、晴らしに来たんだよッ」（ゴォォォォォォォォォォォォ）

（こえー…）

何の恨みかって？（後書き）

なんか、牙って漢字入れようとしたら…当て字（笑）

だぶる飛竜昇天破

牙「それじゃぁ、やろっ☆」

乱「やろって…」

牙「勝負！！恨み晴らすって言ったじゃん♪」

（恨み晴らすっつーのにその笑顔やめてほしいだけど…）

牙「えーっと…じゃあ、はじめるねっ」

乱「えっえっ？…うぐっ」

（今のは…間違いねえ。獅子咆哮弾だ…）

乱「どーしてこの技知ってるの？」

牙「牙瑠ね、兄ちゃんを1ヶ月間ずぅ～っと見てたの。だから兄ち

ゃんの技、全部知ってるよ♪あと、乱馬のとこも1ヶ月

・・・

間。だから牙瑠、兄ちゃんと乱馬が出す技、み～んな使えるよ☆」

（マジかよ…）

牙「火中天津甘栗拳！！」

（不意打ち…それにスピードまで…完全にコピーしてやがる！！）

牙「反撃してこないと、楽しくないよ～…」

（こーなったら、アレを使うしか…！！）

（螺旋のステップ…飛竜昇天破だ～☆）

乱「オイっ！動けよ！！」

牙「えー…だって…乱馬は…かよわい女の子に飛竜昇天破をするつ

もになんでしょ？ヒドいよーー」

乱「うぐぐ…」

（飛竜昇天破はもう撃てねぇ…こーなったら、力ずくでやるしかねぇ！）

牙瑠は乱馬の攻撃を素早く交わしていく

牙「飛竜昇天破！！」

乱「えっ！？」

牙「んじゃ～まったね～♪」

（オレの攻撃を交わしながら飛竜昇天破を撃ってくるとは…）

だぶる飛竜昇天破（後書き）

学校で１時間暇があったので…紙に書いてたらいつの間にか１ページと１／４まで書いてたｗｗ

これでも、まだ…１／４なんだから！！

道場破り（前書き）

牙瑠ちゃん、ゲキ強です

道場破り

ピンポーン

かすみ（以下か）「はぁい。どちらさまでしょう？」

牙「道場破りに来たんだよッ☆」

か「お父さーん、おじさまー道場破りですよ～」

牙「えーおじさんたちと戦うのー？」

早雲（以下早）「おじさんたちと戦うのーって…」

牙「だって、乱馬があのレベルじゃぁ…おじさんたち、それ以下でしょ？」

牙「ねぇ、この家でエロ妖怪とかクソじじいとかおじーちゃんとか

お師匠様とか呼ばれてる人出してよ」

早「えっ？」

牙「そのお姉ちゃん、その人の名前は？」

か「八宝斎よ」

牙「八宝斎さん～！出てきて～♪」

八「誰か、呼んだかのォ？」

牙「おじーちゃん、勝負しよー♪」

八「へっ？勝負？」

牙「やりたくないのー？」

八「えっわしは…そうゆうことじゃなくて…」

乱「ただいまー」

か「あらっ乱馬君、お帰りなさい。さっき、女の子が道場破りに来て…」

乱「その女の子ってあかねよりデカくなかったか？」

か「えぇ。そうよ」

ガラッ

早「おぉ！乱馬君！」

牙「もし、おジーちゃんが勝ったら、牙瑠と一緒にお風呂に入ってもいいよー☆」

乱「オイッ！！！おめー何考えてんだよ！？」

みるみる八宝斎の闘気が高まっていく

牙「わー♪やる気になった～♪」

乱「牙瑠ちゃん、やめとけ！！」

早「乱馬君、その子の知り合い？」

乱「知り合いっつーか…さっきあったばっかりで、オレもよく知らねぇけど、良牙の妹らしい。」

早「へぇ…良牙君の…」

乱「それに…それに…オレはコイツに負けた。」

早「えぇ！？」

乱「…飛竜昇天破を使って来たんだ」

早「ひ…飛竜昇天破ぁ！？」

乱「あいつ、天道家と良牙んとこにそれぞれ1ヶ月いたらしくて、オレらが使う技、全部使えんだよ…」

早「えぇ…そうなの！？」

玄馬（以下玄）「ぱふぉぱふぉー」（そんなー）

乱「言っとくけど…牙瑠は”13歳”だ。」

早「うそー」

玄「ぱふぉ」（そんなわけない）

牙「おじーちゃん、残念だったね♪」

乱，早，玄「はい！？」

乱「マジかよ…」

早「そんな…お師匠様が…」

話をしている間にいつの間にか八宝斎はボロボロになっていた

早「お師匠様！！！」

牙「ダメぇ！！」

早「えっ？何が？」

牙「おじーちゃんに近づかないで！」

早「あっはい…」

（そこで縮こまってどーする…）

牙瑠は倒れている八宝斎のところへ行き、何かをつぶやいた。

牙「牙瑠に、感謝してね♪」

乱「何を！！」

牙「言わなくっても、そのうち分かるから☆」

帰宅

牙「じゃあ、もう牙瑠は家に帰るね♪」

乱「待て！！おめえ、方向音痴だろ？だから家まで一緒に行ってやるよ。」

牙「牙瑠、方向音痴じゃないんだけど…」

乱「何！？良牙があれだけ極度の方向音痴なのに！？」

牙「よく分かんないけど…お母さんが言うには、方向音痴じゃないのは響家で前代未聞なんだってぇ☆」

（良牙ん家、代々方向音痴が引き継がれてんのかよ…）

牙「だし…」

乱「だし？」

牙「乱馬は牙瑠の家に来ない方がいーと思うよッ」

乱「なんで？」

牙「多分…いや、絶対ショック受けると思うから。」

乱「そー言われると、逆に行きたくなるじゃねぇか」

牙「ま、どーでもいーや」

乱「ホントに音痴じゃねえんだな」

牙「だからさっき言ったじゃん」

幸せになれよ

ガチャ

牙「はぁ、疲れたー」

牙「ね♪だから来ない方がいいって言ったんだよ☆」

乱「あ…あぁ…」

牙「あがって☆今、お茶持ってくるから」

リビングのドアを開けてみる。

やはり、ここも玄関と変わらなかった

牙「お待たせー」

乱「この穴は…？」

牙「もう、ホッント困るの！兄ちゃんったらぁ～帰ってくるたんびに無意識のうちにプスプスって穴あけちゃって…あと、このパーターンが２つくらいやっちゃったら…家が壊れちゃうのー」

牙「んま、そんだけ好きなんだよ…だ・か・ら、絶対に幸せになってよ♪そーしないと、ん～どーしよ－あっ飛竜昇天破と獅子咆哮弾お見舞いしてあげるからッ☆」

乱「えっイヤ…それは…」

牙「それがイヤだったら幸せになれよ」（ゴォォォォォォォォォォォォ）

乱「はい…わかったよ…」

（超コエー）

牙「そだ。せっかく来てくれたんだから、さっき牙瑠がおじーちゃんにしたこと教えてあげよっか？」

乱「おぉー聞きてー！！」

コソコソ…

乱「スッゲェ！そいつは助かるぜ！！」

牙「だから、感謝しろって言ったんだよ～☆」

乱「でも、そんなことマジで出来んのか！？」

牙「たぶん♪」

（そんなこと自信たっぷりで言うなよ…）

乱「ヤッベェ！もう、こんな時間じゃねぇか！わりぃけど、オレもう帰っから！！」

分かったよ

居候

ガチャ

乱「オイ…何どさくさに紛れて鍵閉めてんだよ」

牙「だって、牙瑠、一人じゃさみしいんだもん！」

（そーいえば、コイツ１３歳だったな…）

牙「だから、乱馬の家に行くの！！」

乱「おじさんに聞いてみねぇと分かんねぇ。」

牙「なら、早く行こッ☆」

早「ってな訳で連れて来ちゃったの…」

なびき（以下な）「乱馬君も人がいいわねー」

乱「しょうがねぇだろ！13のやつを家にほったらかせねぇよ」

早「う〜んしょうがないな…」

牙「やったぁ♪ありがとね！！おじさん」

乱「いーか、牙瑠、良牙が来るまでだぞ？良牙がここに来たらアイツと一緒に家に帰れ。」

牙「分かってるもんねーだ」

さらば、天道家

牙瑠が天道家に住み着いてから約1週間が過ぎた頃…

乱「こら！！牙瑠！！俺の沢庵返せ！！」

牙「やっだねーだ！来れるものならこっこまでおっいで～」

乱「んゞー…おめぇ、人のもんとるくらいなら家に帰れ！！」

牙「兄ちゃんがここに来るまででしょ♪まだ来てないから帰らないもんねーだ☆」

乱「いーかげんにしろよっ！」

あ「乱馬！！いい加減にするのはあんたでしょ！！！子供相手に情けないわよ！！」

（女の声…おのれェあかねさんという許婚というものがありながら…許せん！！）

ガラガラ！！

か「あら、良牙君、いらっしゃい♪」

良「乱馬ァ！！覚悟！！」

乱「ちょちょっ…ちょっと待て！！良牙！！これには訳が！！」

良「問答無用！！…なんだお前？離せっ！」

牙「イヤ！！」

良「この声は…さっきの女！！先にお前からやってやろうか…」

牙「勝てるもんならやってみてよねっ♪」

良「フンっお前なんかに勝ち目はない」

乱「それはどうかな」

良「乱馬！！余計な口出しするな」

あ「あらッ良牙君、久しぶり。可愛いでしょ？その子。」

良「イヤ…コイツは急に引っ付いて離れなくて…今から戦おうと…」

あ「乱馬！止めてやりなさいよ」

乱「余計な口出しすんなって言われたから俺は知らねーよ」

あ「もう…乱馬ったら…良牙君、その子はね、良牙君の妹なんだって」

良「いっ妹！？コイツが！？」

牙「コイツとは何よ！コイツって」ゴォォォォォォォォ

良「いや…それは…」

（怖いっ）

あ「牙瑠ちゃんって言うの。」

乱「あー、そうそう。牙瑠！！良牙が来たんだからお前はさっさと帰れ！！」

牙「えー」

乱「えーじゃねぇだろ！良牙が来るまでって約束なんだから。」

牙「しょうがないかぁ…」

乱「良牙！牙瑠は方向音痴じゃないから、安心しろ。ちゃーんと家まで連れて帰ってくれるぞ！」

良「はい！？」

乱「じゃあな」

良「おい！乱馬！！！ちゃんと説明しろ！！！！！！！！」

あ「ゴメンねぇ…良牙君。でも、乱馬が言ったとおり、牙瑠ちゃんは方向音痴じゃないから。ね？牙瑠ちゃん」

牙「そだよ～」

牙「あかねさん、今までありがとねッ♪それじゃぁ☆」

あ「また、いつでもおいでね。」

か「良牙君も。いつでもいらっしゃい」

牙「バイバーイ♪ほら、兄ちゃん！！行くよ！！」

良「あっはい。さようなら」

帰宅ー出発

良「お前、本当に俺の妹なのか？」

牙「もっちろ～ん♪」

良「それより…さっきから気になっていたんだが、どうして乱馬はお前と戦はない方がいいって言ったんだ？」

牙「なら一つ、やってみる？」

良「獅子…咆哮…弾か…なかなか出来る…な…」

（コイツ…乱馬に勝ったのか？）

牙「乱馬は、飛竜昇天破でやったよ～ん」

良「何！？飛竜昇天破を！？」

牙瑠は約1ヶ月間、良牙や乱馬たちの様子を見ていたことを話した。

良「ところで、お前いくつだ？」

牙「13歳」

良「13歳！？このののっぽが！？」

牙「妹に向かって”のっぽ”とは失礼ねぇ」

良「あっイヤ…ゴメンなさい」

牙「兄ちゃん、言っとくけど、これ以上家に穴を開けないでね☆」

良「穴？そんなもの開けた覚えはないが。」

牙「ったく…ほら、もー着いたから♪」

良「まさか…これ…全部俺が…」

牙「あったりまえじゃな～い！！兄ちゃんが開けなかったら誰が開けるのさぁ？」

牙「大体、2時間位で戻ってくるから♪それまでに、出来るだけ修理しててね☆」

良「オイ！！こんな時間にどこ行くんだよ！？」

牙「猫飯店と、九能小太刀のところ。んじゃ♪」

猫飯店

シ「来々〜」

牙「ねぇ、あんたがシャンプー？」

シ「そう。ダレだお前？」

牙「響牙瑠。おばばは？」

シ「ひい婆ちゃん？ひい婆ちゃんならアソコね。」

牙「ねぇ、おばーちゃん！手合わせしない？条件付きで。」

お「手合わせじゃ？お主、出来るのか？」

牙「普通にシャンプーなら倒せるよッ☆」

シ「何を言う！！」

お「ほう…シャンプーを…」

牙「乱馬とおじーちゃんはとっくの前に片付けてるから♪」

お「婿殿を…おじいちゃんとは？」

牙「えぇっとねぇ…確か八宝斎とか言う変態のおじーちゃん★」

コロンの顔が一瞬引きつったがすぐに戻った

お「なぬ！？ハッピーをじゃと！？」

牙「うん！！そだよー」

お「お主がさっき言っておった条件とは？」

牙「もし、おばーちゃんが勝ったら、あかねさんと右京を潰してあげるよッ♪でも、もし負けたら、シャンプーに乱馬から手を引いてもらうの☆」

VS可崙

お「お主、なかなかやるのぉ」

牙「そりゃあ、もっちろん♪2ヶ月間修行してたからね☆」

お「どんな修行を？」

牙「兄ちゃんと、乱馬を見はってただけ。とーっても簡単だったよん♪」

（良牙と婿殿を見ていただけでこれらを習得しよったか…確かに、これならハッピーも一溜りもなかろう…）

牙「おばーちゃん！！遊びはここまでだからね☆」

お「なぬ！？お主、これを遊びで…！？」

（火中天津甘栗拳のスピードは婿殿以上…）

牙「火炎弾(かえんだん)！！」

（この技、どこかで見たコトあるね！！）

牙「おばーちゃん！約束通り乱馬からてを引いてね☆んじゃ～」

シ「待つよろし！！」

牙「へ？」

シ「さッきの火炎弾とか言う技、どこで知ったのカ？」

（あれぇ？おっかしいな…シャンプーはあの時居なかったと思うんだけどなぁ…）

シ「早く、答えるよろし。」

牙「ゆーちゃんだよッ☆」

シ「…ゆーちゃん？誰の事言ってるか？」

牙「牙瑠の従姉妹だよッ」

シ「そうか…分かた。」

格闘新体操（前書き）

小＝小太刀

格闘新体操

牙「ごめんくださーい」

小「誰ですの？」

牙「九能小太刀。勝負しよーよ」

小「勝負？私は格闘新体操しかしませんわよ」

牙「格闘新体操…へぇ、面白そうじゃん！！！」

―聖ヘベレケ女学院―乱馬杯

乱「ちょっと待て、どーして俺が！？」

牙「乱馬！！あんたのためなんだから、黙ってて！！！！！！！！」

小「まぁ！乱馬様に対する暴言、許しませんわ！！！」

牙「乱馬、負けたらゴメンね。」

乱「どーゆう意味だ！？」

牙「牙瑠、格闘新体操とか初めてだから♪もちろん、この道具も初めて見るヨッ☆」

乱「牙瑠…お前…」

牙「ま、負けたら乱馬は小太刀のものだから♪」

乱「コイツ…のもの…？」

小「お～ほっほっほっほっほっほ」

ピーーーーーー

試合開始の合図だ

シュルシュルッ

巧みにリボンを操る小太刀。

しかし、牙瑠はというと…

小太刀からの攻撃は交わしているものの、全く攻撃をしようとしない。

小「どうなさったのです？かかって来なさい！！」

牙「うん。でも、その前に…」

シュッ

ボウッ

乱「牙瑠！！てめぇ、何やってんだ！？」

牙「へ？何って、ただ、火をつけただけだよッ」

乱「その、”火”をつけちゃ、いけねぇんだよ！！」

牙「どうして？マッチだって道具だよ！！」

乱「んんん…」

（俺は牙瑠に遊ばれてる…？）

さっきまでは広かったステージも、今や動けるスペースがほんの少ししかない。

ステージのひと角に追いやられた牙瑠。

小「千手棍棒乱れ打ち！」

バトンですべての棍棒を小太刀の手から落とす。

小「カミソリフラフープ！！」

（そんなことしたって、ムダだっつーの）

乱「牙瑠！！そのフープにはカミソリが！！」

牙「誰がそのフープを素手で取ろーとしたの？」

牙瑠はリボンを巧みに使い、一番広がっている所でフープを回して

いる。

が、カミソリが仕込まれているためリボンが切れてくる

（これを…こーして…）

牙「よっ」

右手でリボンをまわし、左手でいつ取ってきたのか、先ほど小太刀が千手棍棒乱れ打ちで使用した何十本もの棍棒を持ち、数本ずつに分けてリボンの中心へ投げ、小太刀へ見舞っていた。

さすがの小太刀もこんな連携技を使って来るとは思っても見なかったようで、あっさり負けてしまっていた。

牙「約束通り、手、引いてくれるよね？」

小「いえ。私は諦めませんわ！！」

一度ため息をつき、

牙「乱馬！！」

ものすごい剣幕で乱馬を呼ぶと、小太刀の目の前で乱馬に水をかけた。

牙「いい？小太刀。これが乱馬の正体。女だと分かったら、手を引いて新しい男を見つけるんだよッ♪」

乱「ちょ…牙瑠…俺は男だぞ」

牙「諦めてもらうには、これしかないでしょ！！」

牙瑠の悩み（前書き）

それと…玄馬の約束でのイトコ設定がここにも。

最初はずっと牙瑠ちゃん視点なんで、カッコなしです。

牙瑠の悩み

イトコ同士でいがみ合いたくないんだよなぁ…

つっても向こうは牙瑠の事知らないけど。

シャンプーとコッチィは口で言っても聞いてくれないし…

ウッちゃんは…

力づくじゃなくていいよね？

あ…自分に言っても答えは帰ってこないのに、何考えてんだろッ

とりあえず…

話してこよッ♪

ーお好み焼きウッちゃん

ガラ

右「いらっしゃい！！あっこの前おった良牙の妹やないの」

牙「イカ玉一つ。」

右「まいど！！」

牙「いただきます♪あっおいしいね～」

右「そやろ？だって、うちのお好み焼きは日本一、いや世界一や！！」

牙「ごちそうさまッ☆」

牙「ねぇ、ウッちゃん。」

右「なんや？」

牙「あのサ、乱馬から手ぇ引いてくれる？」

右「なんやて？うちやて、乱ちゃんの許嫁やで！！」

牙「それなんだけどさ…それは乱馬のお父さんが、屋台に目がくらんで決めちゃったコトでしょ？それに、その時にはもう、許嫁が決まってたし。」

右「なんや？うちにケンカ売っとるんか？」

牙「ウッちゃんは、まだ乱馬に勝ったことないんでしょ？ならやめといたほうがイイよッ☆」

右「乱ちゃんに…勝ったんか？」

牙「今まで戦った中で、３番目に弱かったよ。」

右「乱ちゃんより強い人って…」

牙「八宝斎とか言うおじーちゃんと、シャンプーのところのおばーちゃん。」

右「なん…やて…？」

顔が青くなった右京が言う。

牙「一番弱かったのがコッチィで、次に兄ちゃん。その後に乱馬で、あとの二人は同じくらいの強さだったよッ♪」

（そんなに強いんか…勝負したら店、開けられへんわ…）

右「分かったわ…乱ちゃんのこと諦め切らんけど、手引くわ。」

牙「ありがとッホントに。それじゃ！！」

ガラッ

右「ちょっと待ちぃや！」

牙「なぁに？ウッちゃん。」

右「あんた、良牙の妹やろ？なのになんであかねちゃんと乱ちゃん引っ付けたがるん？」

牙「兄ちゃんが、あかねさんのこと好きだからだよ。」

右「それやったら、なんでなん？」

牙「あかねさんは、乱馬のことが好きなんだよ。乱馬はあかねさんのこと。両想いの二人の仲を引き裂くことは、一番難しい。そこで、乱馬とあかねさんが結婚でもすれば、兄ちゃんは諦めてあかりちゃんと幸せになれるから♪」

右「そうか…」

（お兄ちゃん思いの良い子やなぁ…）

Battle!!

牙「乱馬、勝負しょッ☆」

乱「誰と…ってお前とか!?」

（牙瑠には勝てねぇよ…）

牙「違ーう!!兄ちゃんとー」

乱「なんだ、良牙とか」

（良牙なら、勝てるぜ!!）

牙「勝負は二週間後。校庭でねッ♪」

乱「おう!!」

牙「乱馬、気を抜くなよ。」

（あれ?雰囲気変わった…）

乱「どうしたんだよ?牙瑠」

牙「これから二週間、牙瑠と兄ちゃんは修行する。」

乱「だからどーしたっていうんだよ！？」

牙「乱馬、覚えてる？明依羅，美也子，柚月の三姉妹。」

乱「あぁ…」

牙「あの三人と牙瑠、イトコなんだ。」

乱「それで？」

牙「この前ゆーちゃんと、キャンプに行ったんだよッ修行も兼ねてねッ」

（ゆーちゃんって、一番下の柚月のことだよな…？）

乱「まさか…」

牙「そのまさかだよ♪ゆーちゃんに、桜川流のいろんな技見せてもらった。だから、今度は牙瑠が兄ちゃんに教えるの☆」

（桜川流って意味不明な、掌風剣とか火炎弾とかだよな…）

牙「乱馬！！！二週間の間に桜川流に対抗できる技を編み出せるかなぁ？？？」

（あれに対抗出来る技を二週間…）

乱「おう！！！桜川流だかなんだか知らねぇが、やってやろーじゃねぇか！！！」

Ｂａｔｔｌｅ！！（後書き）

牙瑠ちゃんが桜川流を覚えてしまった今…

勝てる人はいるのか？？

俺は…（前書き）

多分…乱馬君のひとりごとw

ネガティブ乱馬君入ります

俺は…

帰るとき…牙瑠は…

”もし乱馬が負けたら、あかねさんは兄ちゃんのモノだからねッ”

もし俺が負けたら、あかねは良牙のモノ…

俺、何やきもち焼いてんだろ…

やきもちを焼くってことは、俺、あかねの事が好きなのか…？

いや…そんなことはない。

―だったらなんでやきもちを焼く

分からない。

イライラする。

俺は、良牙よりあかねのことを知ってる。

それは、良牙に負けねぇ。

でも…

”良牙が桜川流を使いこなす”

となると…俺に勝ち目はない。

イヤ、俺はぜってーに勝つ!!!

良牙なんかには負けねぇ。

―今まで、良牙に負けたことはあったか?

ない。

二週間の間に俺は、ぜってー対抗技を編み出してやる!!!!!

修行1

牙「兄ちゃん、よく見てて　ねッ」

良「お、おう」

（何をするつもりなんだ…？）

ドガーーーン

良「は、牙瑠…今のはなんだ？」

牙「獅子気流弾（ししきりゅうだん）だよッ」

良「どうやってするんだ？」

牙「はい、これ。ブレスレット♪」

良「こんなもん、何に使うんだ？」

牙「このブレスはね、周りの自然の力を集めてくれるんだよッ☆」

（俺にはただのブレスレットにしか見えんのだが…）

牙「牙瑠、このブレスなしじゃ桜川流はホトンド出来ないのー」

良「そ、そうか」

牙「兄ちゃん、この　ブレス付けてから、獅子咆哮弾(ししほうこうだん)やってみて～」

―獅子咆哮弾！！

ドガーーーン

牙「ホラ出来たッ」

良「これが…獅子気流弾なのか…？普通の獅子咆哮弾と変わらないようだが…」

牙「今、獅子気流弾撃った後に気が抜けた？」

良「そうか！！」

牙「そ。獅子咆哮弾は”気”を使って、放った後に放心状態になる。でも、獅子気流弾は放心状態にならないし、わざわざブルーな気分にならなくても使えるんだよッ♪」

牙「んで、掌風剣(しょうふうけん)は相手に自分の手のひらを見せるだけでオッケー

だよ～」

良「こうか？」

ビュー

牙「そそ。この、今やった二つの技はブレスさえしてたら、どこでも出来るから便利だよッ」

牙「次が、一番キケンな電拳剣（らいしょうけん）。」

良「なんで危険なんだ？」

牙「失敗すると、感電するらしーんだよねー。」

良「感電…」

牙「やり方はね、このブレスしてる手を真上に上げて、相手に向かってドボンするんだよッ」

良「その、相手に向かってドボンとはなんだ？」

牙「相手攻撃すんの。だから、手を上に上げて、その上げた手で相手を殴るの。んで、ここで注意したいことが―ってあぁ！！！ちょっと兄ちゃん！！兄ちゃんってば！！！」

良「んん…」

牙「ったく…兄ちゃんなんで牙瑠の説明最後まで聞かないのさぁ…」

良「スマン。それで、その説明は？」

牙「3秒以上手を上げてると、感電するの。」

良「危険だな。」

牙「次が、氷棘剣（ひょうきょくけん）だよッ♪これはね、寒ーいトコで掌風剣すれば、おけ。」

良「寒いところで掌風剣、か。」

牙「そー。で、最後が火炎弾《火炎弾》。これは暖(あったか)いトコで、獅子気流弾ねー。」

良「暖かい所とは、どこらへんだ?」

牙「普通に沖縄とか…でも、兄ちゃんどこらへんが沖縄とか知らないでしょ?」

良「う…」

牙「今日は、ココまで!!!明日は、岩石弾(がんせきだん)、岩石流(がんせきりゅう)、湯砲(とうほう)、噴湯(ふんとう)だからねッ」

修行2

牙「おはよー兄ちゃん。それで、昨日も言った通り、今日は岩石弾、岩石流、湯砲、噴湯だからねッ」

良「おっおう」

（岩石流と岩石弾…俺が負けた技。絶対覚えてやる！！）

牙「岩石弾。これは、岩場でやるのがベスト。周りにゴロゴロ岩があるとやりやすいから。ちょっと待って」

（牙瑠は何するつもりなんだ…？）

シュウシュウシュウ

良「あちっ熱！！」

牙「あ、ゴッメ～ン。まちがって炎だしちった」

と言ってペロッと舌を出す

牙「次は、失敗しないようにするからさッ」

ダーンダン

牙「出来たーー♪まだあんまり慣れてないから音がデカいけど、我慢してね～」

見事な岩場だった。

良「これは…俺が柚月という女と戦った時と同じ！！」

牙「そー。そんでー、一回、地面に手ついて。そっから岩石流って言って？」

（スルー…？）

良「岩石流！！」

ガンっガンっドーン

牙「おーすっごぉい！！上手だね～♪次！！岩石弾は、さっきより力篭めて手ついて、岩石弾って言って。」

良「岩石弾！！！！」

ドドド…バーーーーーーーーーーーーン

牙「やっぱ、兄ちゃんは技の呑み込みが早いや。ちょぉっと待って。」

ジャバーーー

牙「あっ兄ちゃん…ゴメン」

良「ぷぃ～っぷっぎっぎゅ」

牙「湯砲っ」

良「牙瑠、今のはちょっと熱かった…」

牙「ゴメン…んで、湯砲は水があるところで、掌風剣。」

良「こんな簡単なのか？」

牙「そだよ～噴湯はね、ばんざーい。」

良「ばんざーい」

バシャバシャバシャ

牙「かんせ～い。もうこれで桜川流はマスター出来たねッ♪」

修行２（後書き）

激短！！ｗｗ

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8487r/

兄ちゃんの恨み

2011年10月8日19時10分発行